
キットアス 50音順小説Part ~ き ~

黒やま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キットアス 50音順小説Part〳き

【Nコード】

N0377Y

【作者名】

黒やま

【あらすじ】

50音順小説Part〳きです。

題名と主人公の名前と最初の一文を「き」ではじめてみました。

(前書き)

話の方向性が微妙に傾いた・・・

「昨日までの私だと思ってもらっちゃ困るわっ！」

テレビの向こうで私の双子の妹、明日香あすかの声が聞こえた。

声が聞こえたというのは明日香は声優せいゆうだからだ。

故に姿はなく声だけが聞こえた。

しかし最近では声優でありながら写真集を出版したり、CDを出したりするほどの人気の勢いで

いわゆるアイドル声優というものらしい。

この前なんてバラエティー番組にゲスト出演していた。

明日香が主人公を演じている人気アニメを見て思う。

私と明日香は一卵性いちらんせい双生児ふうせいこだ。

当然ながら容姿も背格好も瓜二つで普通なら両親も区別はつかない。

それどころか趣味・癖・学力・好きな食べ物から好きになった人も今まで同じ

忘れ物をするタイミングも一緒だった。

それなのに私と明日香には決定的に違うものがひとつある。

それが声。^{こゑ}

普通一卵性双生児なら顔も声もそっくりなはずだ。

なのに声だけ全くちがっていた。

明日香の声は可愛らしくてまさに今の職業にぴったりの声だ。

それに比べて私はまるで酒焼けした声。

小さい頃はそんなことなかったのにいつからかこんな声になってしまった。

このだみ声のせいで小学生の時分ついたあだ名が『ドラ○もん』。

「全く・・・なんでここだけ違うかな。」

つい思っていることが口から出てしまい

どうやら夕食の支度をしていた母に聞こえたらしい。

「今日香^{きょうか}、そんなこといつまで言ってたっしょうがないでしょ。

それより勉強しなくていいの？これで第一志望の大学に受かるのかしら。」

私、今日香は今年大学受験を控えている。

とくにコレといったものがないのでとりあえず地元の大学に進学し

ようと思っている。

「いいの、今は休憩中。」

先ほどまで英単語の暗記に没頭していたところだ。

それで一息入れようとリビングに行きテレビをつけたら

ちょうど明日香の出ている番組がやっていたというわけだ。

そんな明日香は大学には進学せず、声優業に専念するため上京する
そうだ。

今や人気声優の仲間入りを果たしたのだからそれもそうなのだろうが
いつも一緒だった存在がいなくなるのはやはり寂しい。

「明日香も学校と仕事両立して頑張ってるんだから今日香も頑張
なさいよ。」

またか、明日香が声優デビューしてからはいつもこうだ。

昔は明日香の方が「お姉ちゃんを見習いなさい。」とか

「お姉ちゃんが頑張っているんだから明日香も頑張ринаさい。」な
んて言われてたし、

明日香だってよく「きょうちゃん助けて。」って何かあるごとに私
にすがりついてたのに。

今じゃ立場逆転。明日香も頼らなくなったし、むしろ明日香の方がしっかり者といわれている。

姉の威厳がなくなりつつある。

「ただいまー。」

玄関が開く音とともにさっきまでテレビで流れていた声が聞こえた。

うわさをすれば・・・

「ふう。あつ、きょうちゃんだ。」

唯一昔と変わらない呼び名で私を呼ぶ妹。

「おかえり。」

いつもながら鏡で見ているようにそっくりなもうひとりの私。

明日香の人気が出てからは街でよく声をかけられる。

けれど私の声を聞くと皆一様に驚く。

それもそのはず、あの可愛らしい声がすると思ったらこんなしゃが嘸れた声がするのだから。

「きょうちゃん、今日は何があつた？」

この時期の三年生は特別編成授業に入っており進学しない明日香はほとんど学校に來ない。

「今日も特になし。みんな黙々と参考書に向かい合っただけ。」

「そっか、みんな忙しいんだね……。」

「忙しいっていつなら明日香もそうでしょ。」

「あっ、それはそうなんだけど。」

今日は早朝から新幹線ではるばる二時間半もかけて行き夜までみっちり仕事をしてきたのだから

明日香も受験生並みに大変なものには相違ない。

着替えるため明日香が二階へ向かった後

「明日香、最近元気ないわよね。今日香何か知らない？」

母もそう思っていたらしく私に尋ねてきた。

「いや、心当たりはないけど。」

このところどうも明日香の様子がおかしい。

仕事はしっかりこなしているっばいけど、家ではずっと上の空。

やはり姉としては心配なところだ。

久しぶりに姉としての本領発揮か？

私は重い腰を上げて二階へと続く階段を上った。

コンコンコン

「きょうちゃん、入っていいよ。」

ノックしただけで私だと分かってしまう。

ガチャ

「ああ、明日香？何で私だってわかったの？」

「だってきょうちゃん、私と同じでノック三回するじゃない。」

確かに明日香はノックを三回する癖がある、ってことは私も同じ癖があるのか。

「そうなんだ。自分じゃ気付かなかった。」

「自分じゃなかなか気付かないことってあるよ。」

「何か悩みでもあるの？」

私の単刀直入の質問にふふっと笑っていた明日香の表情が硬くなった。

「何でわかるの？」

「見てれば分かる、自分じゃなかなか気付かないことってあるよ。」

先ほど明日香が言った言葉をそっくりそのまま返してやった。

「最近じゃ私の方がいろいろ話聞いてたのにな。」

そこで明日香は私の目をまっすぐみつめてきた。

「私、不安なの。これから上京して一人暮らししながら仕事ちゃんと出来るかなって。」

正直驚いた。明日香がそんなことを考えていたなんて。

「今でさえいっぱいいっぱいなのに……。だからここから通おうかなって思ってる。」

「でも前より仕事量増えてきているんですよ。それなら東京に引っ越した方が……。」

「わかってる。でも……。」

はつきりしない。まるで昔の明日香だ。

そこで思い出した。

小さい頃、明日香は優柔不断で寂しがり屋だった。

一人で留守番ができなかった。

なんだ、変わってないじゃん。

「よしっ！」

いきなり立ち上がった私にきょとんとする明日香。

私の決意表明けついひようめいを明日香に聞かせる。

「ええ！だつてきょうちゃんはそれでいいの？」

「いいよ。やっと私のすべきことが見つかったって感じだし。それに明日香は私の妹じゃない。」

昔よく困った明日香を助けるときに言ってた台詞をもう一度いこうとなると思わなかった。

「ありがとう、きょうちゃん。」

私はやはり姉なのだなと思う。

そして新しい決意のもとに母のところへと向かった。

「今日香？夕飯できたから明日香呼んで。」

何も知らない母が背中越しに声をかけた。

「お母さん。私、東京の大学受験する。それで明日香と二人で暮らすよ。」

いきなりのことで母は相当驚いていた。

「えっ！？いつ今から大学変えるって……。なんでいきなりすぎるわよ。」

「いきなりでもなんでも。」

そして私は夕食後再び自室にこもり受験まで徹夜で勉強した。

きっと明日はいい天気だ。

(後書き)

その後無事合格。二人で上京して仲良く暮らし始めましたとき。めでたしめでたし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0377y/>

キットアス 50音順小説Part～き～

2011年11月16日21時58分発行